

日本語母語話者の雑談における「物語の開始」 ——発話順番のやり取りとの関係を中心に——

李 麗 燕*

キーワード：日本語母語話者、物語、物語の開始、発話順番(のやり取り)、物語を開始しようとする状況

要 旨

本稿では、雑談の中に現れる「過去に発生した出来事の報告」を「物語」と呼び、また、「発話順番」を「一人の会話参加者が話し始めてから話し続けることをやめるまでを指すもの」と定義した。語り手が物語を開始するには、発話順番をすでに持っているか、取得(または奪取)するか、受け取るかしなければならない。言い換えれば、「物語の開始」は「発話順番のやり取り」と深く関わることである。本研究はこのような認識に基づき、日本語母語話者の雑談における「物語の開始」に焦点を当て、それと「発話順番のやり取り」との関係について実証的に考察したものである。

まず、会話参加者が物語を開始しようとする状況を次の4つに分けて詳述した。

- 1) 発話順番を受け取ることによって、物語を開始しようとする
- 2) 発話順番を持っている途中で、物語を開始しようとする
- 3) 発話順番を取ることによって、物語を開始しようとする
- 4) 発話順番を競うことによって、物語を開始しようとする

次いで、物語の開始はどの状況でどの程度行われているかについて考察した結果、(1) 会話参加者は発話順番を競うことによって、物語を開始するのを避けていること、(2) 会話参加者は発話順番を持っている途中で、あるいは、発話順番を取ることによって、物語を開始しようとする場合が殆どであることが分かった。

1. はじめに

本稿では、雑談の中に現れる「過去に発生した出来事の報告」を「物語」と呼ぶことにする。雑談の中で「物語」をするのは、語り手にとっては簡単なことではない。他の会話参加者の行動により、物語が始められなかったり、途中で中断させられたりすることもあるという理由で、物

* LEE Li-yen: 銘傳大学応用日本語学科講師。

語を雑談のような場面で成し遂げるためには、語り手は何らかの技術を使うことによって、他の会話参加者である物語の受け手に働きかけなければならない。まず、物語を始めるための技術が必要とされる(メイナード 1993; 李 1997c; Jefferson 1978; Maynard 1989; Polanyi 1985; Sacks 1972)。次いで、物語を続けるための技術を見捨てるわけにはいかない(李 1997a; 李 1997b)。なお、物語を終えるための技術も知っておくべきであろう(李 1998a)。そして、物語を始める、続ける、終えるための技術は、「発話順番のやり取り」(turn-taking)と深く関わるものである。このような認識に基づき、本研究では、日本語母語話者の雑談における「物語の開始」に焦点を当て、それと「発話順番のやり取り」との関係について考察する。これは、会話参加者が物語を開始しようとする状況、また、物語の開始がどの状況でどの程度行われているかという実態を明らかにしようとするものである。

2. 研究方法

考察に用いるデータは実際に行われた雑談から採ることとした。雑談は、筆者が日本語母語話者に頼んで録音してもらったものである。「親しい友人と雑談するチャンスがあれば、その雑談を録音してください」というのが依頼の内容である。全部で15本の雑談(約10時間のデータ)を収集した。いずれも親しい友人同士(19~35歳の女性同士)2人によって、1994年から1996年までの間に行われたものである。録音テープは筆者が文字化し、それを日本語母語話者に確認してもらった上で、分析のためのデータとした。以下は本稿における会話例の表記方法である。

〈時間の経過と共に横に進み、2人の発話の重なり部分が見えるように表記する〉

()	非言語行動	△△, ▽▽	地名・機関名
[]	聞き取りの曖昧な部分	↑	上昇音調
×	聞き取れない箇所(1拍を表す)	↓	下降音調
~	沈黙の間(1秒を表す)	~~~~~	物語の報告の部分
○○, □□, ◇◇, ☆☆	人名		

本稿では、データで繰り返し起こっているパターンについて考察する。これはエスノメソドロジスト達(ethnomethodologists)によって確立された「会話分析」という経験的・帰納的なアプローチである。

3. 「発話順番」に関する先行研究

メイナード(1993)は、「発話順番」を次のように定義している。

「発事順番」とは会話において一人の話者が話す権利を行使するその会話中の単位で、会話の当事者によりその何らかの意味又は機能を持っていると認められたものである。しかも、ある発話が誰かの発話順番であると認めるためには、話し手と聞き手両者とも発話の順番を取る者が何かを言うことを認め、それを補う形で聞き手は聞き手の役目をひき受けなければならない。このような状況が確認される時、話し手が発話順番をとったとする。

(メイナード 1993: 56)

「発話順番のやり取り」は会話において最もはっきり観察される現象であり (Yngve 1970: 568), 会話はそれによって特徴づけられる (Levinson 1983: 296). 李 (1995) は、それを「発話順番の終了」「発話順番の譲渡」「発話順番の取得(または奪取)」「発話順番の受取^{うけとり}」の4種類に分けている¹。「発話順番の終了」とは、話がもう終わったので、話し続けるのをやめることである。「発話順番の譲渡」とは、話す機会を他の会話参加者に譲ることである。一方、「発話順番の取得(または奪取)」とは、話す機会を自主的に掴むことであり、また、「発話順番の受取」とは、他の会話参加者から譲られた話す機会を(受動的に)受け取ることである。

「発話順番のやり取り」に関する代表的な先行研究は、Sacks et al. (1974) である。彼らは、「発話順番のやり取りのルール」を以下のように提示している。

3.3 RULES. The following seems to be a basic set of rules governing turn construction, providing for the allocation of a next turn to one party, and coordinating transfer so as to minimize gap and overlap.

- (1) For any turn, at the initial transition-relevance place of an initial turn-constructional unit:
 - (a) If the turn-so-far is so constructed as to involve the use of a 'current speaker selects next' technique, then the party so selected has the right and is obliged to take next turn to speak; no others have such rights or obligations, and transfer occurs at that place.
 - (b) If the turn-so-far is so constructed as not to involve the use of a 'current speaker selects next' technique, then self-selection for next speakership may, but need not, be instituted; first starter acquires rights to a turn, and transfer occurs at that place.
 - (c) If the turn-so-far is so constructed as not to involve the use of a 'current speaker selects next' technique, then current speaker may, but need not continue, unless another self-selects.
- (2) If, at the initial transition-relevance place of an initial turn-constructional unit, neither 1a nor 1b has operated, and, following the provision of 1c, current speaker has continued, then the rule-set a-c re-applies at the next transition-relevance place, and recursively at each next transition-relevance place, until transfer is effected.

(Sacks et al. 1974: 704)

¹ 「発話順番の終了」「発話順番の譲渡」「発話順番の取得」「発話順番の受取」を表すマーカーについては、李 (1995) を参照のこと。

一方, Bygate (1987: 39) は効率的な「発話順番のやり取り」は, (1) 発話順番を取りたいという信号を送る, (2) 発話順番を取るタイミングを知る, (3) 発話順番を失わないために必要な行動を行う, (4) 他の会話参加者の発話順番を取りたい意欲を察知する, (5) 発話順番を譲る, の5つの能力を必要とすると言っている。

また, Duncan (1972: 286-287) は, 「発話順番の譲渡」(turn-yielding) の信号として, intonation, paralinguistic (drawl), body motion, sociocentric sequences, paralinguistic (pitch/loudness), syntax の6つを挙げている。

以上のように, 「発話順番」に関する先行研究は少なくないが, 「物語の開始」に焦点を当て, それと「発話順番のやり取り」との関係を中心に論じたものはまだ見当たらない。

4. 本研究における「発話順番」の定義

中田 (1990: 113) は, 「話順 (turn)」を「一人の話し手が話し始めてから次の話し手が話し始めるまでを指す」ものとしている。この定義に従うと, 次の図に見られる ■ の部分が前の話者, □ の部分が次の話者の話順になる。言い換えれば, ここでは, 前の話者の発話の一部である □ の部分(発話の重なる部分)が話順の一部として認定できないことになる。話順の一部として認定できない場合, この □ の部分をどう解釈すればいいかが問題になる。

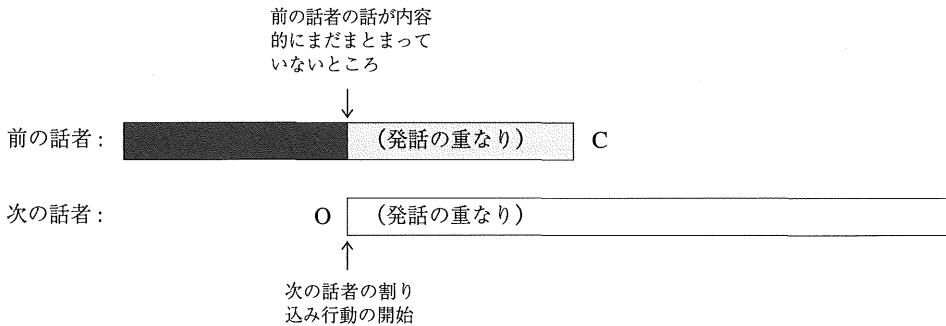


図 1

本研究では, 「turn」「話順」の代わりに, 「発話順番」という言葉を使う。また, 中田 (1990) とは違って, 「発話順番」を「一人の会話参加者が話し始めてから話し続けることをやめるまでを指すもの」と定義する²。ここで言う「話し続けることをやめる」とは, 具体的に, 次の3つの状況として観察される。なお, この3つの状況は発話順番が終了する型でもある。

² 但し, 後続発話を考えている間の沈黙は「話し続けることをやめる」とは認定しない。

- 1) 話す機会を他の会話参加者に譲るため、話し続けることをやめる
(他の会話参加者に情報や同調を求めること)
- 2) 話がもう終わったので、話し続けることをやめる
(情報提供行動を終えること)
- 3) 話がまだ終わっていない時、他の会話参加者の発話による遮りで、話し続けることをやむを得ずやめる

一方、話す機会を他の会話参加者に譲ったり、話がもう終わったという理由で話し続けることをやめたりしても、他の会話参加者は何も話さないことがある。この場合、元の話し手が話し続けたら、別の発話順番の開始として扱う。次の図に見られるように、話し手が発話順番を譲渡 / 終了する信号を出しても、他の会話参加者が誰も発話順番を取らないために、今までの話し手が話し続けることになった場合は、別の発話順番の開始と考える。

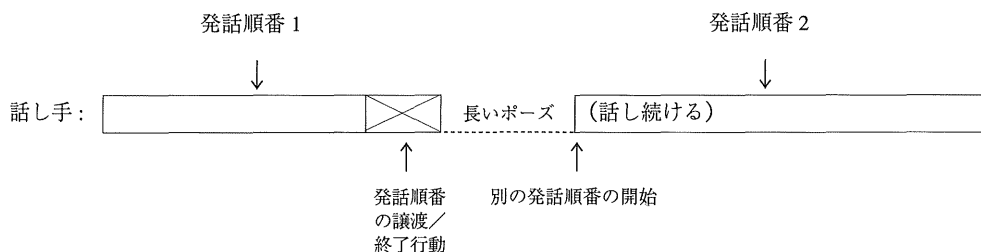





図 2

「一人の会話参加者が話し始めてから話し続けることをやめるまでを指すもの」という「発話順番」の定義は、会話参加者の意図を考慮に入れたものである³。この定義によると、前の図 1 に見られる  の部分も前の話者の発話順番の一部として認定することになる。つまり、前の話者の発話である  が 1 つの発話順番になる。次の話者の発話である  も 1 つの発話順番になる。また、前の話者の発話順番は「C」というところで終わり、次の話者の発話順番は「O」というところから始まるため、話者の重なる部分が発話順番の競合部分になる。

前の話者が発話順番をどう終了するのかは、次の話者が発話順番を手に入れる際の難易と深く関わる。前の話者が「1) 話す機会を他の会話参加者に譲るため、話し続けることをやめる(他の会話参加者に情報や同調を求める)」という型で自分の発話順番を終了するのは、別の会話参加者の話を聞くためであり、従って、その際に、その会話参加者が譲られた発話順番を受け取って何かを話し出すのは簡単なことである。なぜなら、発話順番を受け取ることに對して、前の話者(及びその他の会話参加者)は妨げるようなことをしないからである。一方、前の話者が「2) 話

³ 本研究で用いたデータは録音によって収集した雑談であるため、会話参加者の意図は前後の発話内容や音声によって判断する。

がもう終わったので、話し続けることをやめる(情報提供行動を終える)」という型で自分の発話順番を終了する場合、会話参加者の誰でも次の話者になれるため、複数の会話参加者がほぼ同時に発話順番を取ろうとして、発話順番の配分に関するトラブルを起こすことがある。言い換えれば、ここでは、自分が発話順番を取りたくても、他の会話参加者が、それを妨げるようなことをする可能性があるため、発話順番を手に入れるのが難しいことがある。なお、「3) 話がまだ終わっていない時、他の会話参加者の発話による遮りで、話し続けることをやむを得ずやめる」という型で発話順番を終了する場合は、次の話者に発話順番を取られたことになる。その際、発話順番を手に入れる目的を達成するために、次の話者は前の話者の話す意欲を押えるための何らかの行動を行わなければならない。このように、発話順番を手に入れることは、「発話順番を(受動的に)受け取る」→「発話順番を(自主的に)取る」→「発話順番を競う」という順序で、次第に難しくなると思われる。

5. 物語を開始しようとする状況

発話順番を受け取る・取る・競うことによって、次の話者になり、ある物語を開始しようとすることがある。その他に、発話順番を持っている途中で、物語を開始しようとすることもある。それぞれの状況で物語を開始しようとするのは、次に見られるような順序で次第に難しくなると思われる。それを次の5-1~4で詳述する。

- 1) 発話順番を受け取ることによって、物語を開始しようとする
- 2) 発話順番を持っている途中で、物語を開始しようとする
- 3) 発話順番を取ることによって、物語を開始しようとする
- 4) 発話順番を競うことによって、物語を開始しようとする

5-1. 状況1: 発話順番を受け取るによって、物語を開始しようとする

他の会話参加者から譲られた発話順番を受け取ることによって、物語を開始しようとすることがある。その際には、発話順番を譲ってくれた会話参加者(及びその他の会話参加者)は自ら物語の受け手に回って物語を聞くのが普通である。

次の(例1)では、話者Qの「この前、テニスの試合、どうだった↑」(02行目)という発話が観察される。これは、話者Pに発話順番を譲っているもの、話者Pに物語の開始を促しているものである。これに応じて、話者Pが発話順番を受け取って、「あー、テニスの試合ねー、あれねー、結局、勝ったんだけどー、…」(01, 03行目)のように、物語を開始している。

(例1) 資料7より

01 P	(笑う)	あー テニスの試合ねー
02 Q	(笑う) うーん あたしはねー	この前 テニスの試合 どうだった↑
03 P	あれねー 結局 勝ったんだけどー	えとね 何だっけ ○○さんとー
04 Q		うん 誰と当たったんだっけ うん うん
05 P	○○さんっていうのはー	一個上でさー 結構 有名な人じゃん もう1人は なんか 下
06 Q		うん うんうん
07 P	の学年のー □□ってー	う わたしは 初めて聞いたんだけどー うーん での
08 Q	うん	うん ー なんか ま

次の(例2)で、話者Pの「前髪、でも、伸ばしてんの↑、あんの↑」(09,11行目)という発話は、話者Qに前髪に関する情報を求めている質問である。この質問によって、発話順番を話者Qに譲っている。これに対して、話者Qは話者Pの譲った発話順番を受け取っているが、話者Pの求めている情報を提供せずに、「成人式の時、全部、バツサリしちゃった、…」(12行目)のように、髪のを切られた物語を開始している。

(例2) 資料14より

01 P	(笑う) きっ	でも 短いじゃない↑ ちょ
02 Q	え 眉毛 書くの うまくなったと思わない↑	そうそう
03 P	っ もう ちょっと なんかさー	こうっ ちょっと 急降下しすぎじゃん あれは わたしも へ
04 Q		分かんない
05 P	ったくそなんだけどー	うーん
06 Q		でも 分かんないよね 自分のって わたし 分かんないもん もう ちょっ
07 P	ちょっと こことこ この間隔が足りすぎじゃない↑	もう ちょっと それで
08 Q	と 長い方がいい↑	そう↑
09 P	もう ちょっと 心持ち 長くして	前髪 なん それ 全部 のっ やー (笑う) 前髪
10 Q		そう↓
11 P	でも 伸ばしてんの↑ あんの↑	わたしも切ったんだ
12 Q		成人式の時 全部 バツサリしちゃった バージャーー とか 切
13 P	きっ 切られたの↑	あん 昨日の↑ 昨日
14 Q	られちゃって	うん 違う ○○君 って 言ったっけ ×× ××
15 P	どこ 行ったの↑	うん うーん
16 Q	××× そうそうそうそう [ドライバー 遊んだとかー それ] で ○○	
17 P	(笑う)	
18 Q	君が切るの 大好きでー (笑う) 切っていい↑	っていうから えー とか言って 切ったら
19 P	(笑う)	
20 Q	可愛くなるよ と あー じゃ 切って	ハー とか切って でさー 成人式の時 いいじゃ

5-2. 状況 2: 発話順番を持っている途中で、物語を開始しようとする

発話順番の途中で物語を開始しようとすることがある。物語を開始しようとする時点で、もう、すでに発話順番を持っているため、今までの発話に引き続き、物語を開始すればいい。その際、他の会話参加者は引き続き、自分の発話(物語)を聞き続けてくれるのが普通である。

次の(例3)で、話者Qの「6時から代官山↑」(08行目)という発話は、情報の正確さを話者Pに確認してもらおうためのものであり、また、発話順番を話者Pに譲っているものでもあると思われる。これに対して、話者Pは発話順番を受け取って、「うん、そう」(07, 09行目)と、情報の確認を与えた直後、「ただね、あたしねー、昨日、□□ちゃん、分かる↑」「□□ーとかも、誘ってみてー、って、○○に言われてー、…」(09, 11行目)のように、昨日□□ちゃんに電話して話したことの報告をすぐ開始している。ここでは、話者Pは、「うん、そう」という自分の発話に引き続き、つまり、発話順番を持っている途中で物語を開始している。

(例3) 資料6より

01 P	○○ どうする↑ それ	なんも聞いてない っ
02 Q	あー どうしようかなー なんか 詳しいこと 聞いた↑	え
03 P	ていうか だから いけーっ 本人だよ うん で 行けるんだったら 詳しい案内 おっ 送る	
04 Q	本人から電話があったんでしょ	
05 P	ていうか とにかくー 代官山で 6時から	うーん あ それも あたし 書いてなかつ
06 Q		6時から スー
07 P	たっけ メール	うーん 11日 土曜日 うん うん
08 Q	あの 6時から	は聞いた気がする 11月11日 土曜日 6時から代官山↑
09 P	そう ただね あたしねー 昨日 □□ちゃん 分かる↑	□□ーとかも 誘ってみてー っ
10 Q		うんうーん
11 P	て ○○に言われてー もう すっごい 久しぶりに 電話したのねー わーっ 元気↑ とか言っ	
12 Q	うん	うん
13 P	て そしたら □□ねー なんか えーと なんだったかな あー 労働省の 外郭団体かなんか	
14 Q		
15 P	なんだけどー えーとね △△センターみたいなところに 就職 決まったんだって	
16 Q	うん	え 今年↑

次の(例4)で、話者Qの「みんな、地元で働く××、バイトするよねー」(02行目)という発話は話者Pに同調を求めているものである。話者Qはこの発話によって、発話順番を話者Pに譲っているとも思われる。これに対して、話者Pは発話順番を受け取って、「そだよねー」(01行目)と同調を表してから、「でもねー、あたし、自分がバイトの時に、高校の時の先生とかもね、来た、…」(01, 03行目)のように、バイトの時に発生した出来事について、すぐ報告し始めている。この物語の開始は「そだよねー」という自分の発話に引き続き、つまり、話者Pが

発話順番を持っている途中で行われたものである。

(例4) 資料11より

01 P	うん	うーん	そうだよー	でもねー						
02 Q	ふーん	そっかー	みんな	地元で働く××	バイトするよー					
03 P	あたし	自分がバイトの時に	高校の時の先生とかもね	来た	体育の先生だった					
04 Q			嘘ー	嘘	なんか					
05 P	なんかね	そう	ハー	先生	とか	言っちゃった	いらっしやいま			
06 Q	話した↑	こんにちは	とか言って	××						
07 P	せ	××××	先生	××××	あっ	レジ	来た時に	結構	店内	広いからー
08 Q			入ってきた時に↑	うーん	う					
09 P	入ってきて	も	分かんないんだー	レジ	来た時	ハーツ	先生ー	覚え		
10 Q	ん	うーん	(笑う)	覚えてた↑						
11 P	てた	だから	先生も	創価学会	やってる人だからー	うちに	前	来てたのねー	うー	
12 Q	ふーん		えっ	創価学会↑						

次の(例5)では、話者Pの化粧品に関する話を聞いて、話者Qが「へー、そっかー」(12, 14行目)という発話によって、フィードバックを出している。また、この発話によって、発話順番を取っているのも観察される。この発話の直後、つまり、発話順番を持っている途中で、話者Qは「あ、そう言えば」(14行目)に引き続き、「なんか、1日、あたし、ほら、テレビ番組、元旦のさー、…」(14行目)のように、テレビ局からの電話に関する物語をすぐ開始している。

(例5) 資料15より

01 P	〇〇	とかいう	化粧品でー	皮膚科医が勧めるとか言ってー	あたし	駄目だったんだ					
02 Q	うーん	うんうん	うーん	(笑う)							
03 P	(笑う)	だま	騙された	とか××××	棚に	棚にさー	色々	書いてあってー	なんか	皮	
04 Q	〇〇	(笑う)	うーん	うーん							
05 P	膚科の医師がどうだ	なんだか	どうだ	こうだ	って	書いてあったから	本当かなー	サンプル			
06 Q	うんうんうん	うん									
07 P	もらったしー	とか思ってー	やってたら	全然	なんか	なんか	つぱっちゃって	あ	駄目だ		
08 Q	うん	(笑う)	(笑う)	(笑う)							
09 P	ー	わたし	これ	男じゃない↑	リ	リ	リーじゃない	リンだ			
10 Q	(笑う)	男なの↑	女なの↑	〇〇って							
11 P	よ	〇〇・リンなんて	きっと	名前がさー	うん	きっと	そうだよ				
12 Q	リン	(笑う)	(笑う)	すーごい名前だねー	へー						
13 P	うん	あん	あん								
14 Q	そっかー	あ	そう言えば	なんか	1日	あたし	ほら	テレビ番組	元旦のさー	やつ	登録し
15 P	うーん	うん	うん								
16 Q	てるじゃん	でー	30ー	じゃない	30日ぐらいに	電話	かかってきてー	1日のー	朝7		

17 P		うん		うーん		×××
18 Q	時ぐらいからー	なんかっ	すごい	8時間ぐらい	あのー	やりませんか↑
19 P	××		うん			うん
20 Q	で	何ですか↑	って言ったらー	(笑う)	なんかね	お弁当も出ます
					とかいう	2食 出

上に挙げた(例3)~(例5)では、語り手は、発話順番を受け取ったり(例3, 例4)取ったり(例5)してから間もなく発話順番の途中で、物語を開始している。一方、物語を開始しようとする前に、語り手はもう、すでに、発話順番を長く持っていることもある。次の(例6)では、話者Pが今までの自分の話の流れに乗って、「ただ、この前、なんか、そのモニターが、映んなかったのね、で、大慌てでー、…」(07, 09行目)のように、ビデオを撮ろうとした時に発生した出来事について報告し始めている。物語を開始する前に、話者Pは、すでに、発話順番を長く持っているため、ここで観察される物語の開始も発話順番の途中で行われたものである。

(例6) 資料1より

01 P	あー	カメラテスト	やってー	で	なにー	んーとー	ー	ちょっと	最初	喋ってる時	ピッ
02 Q					うん						うんうん
03 P	と	かって	撮るのね	で	一応	巻き戻してー		あの	再生してー	あっ	入ってる
04 Q			うんうんうん			うん	それ			うん	
05 P	ってる	って	感じでー		録音してるからー	うん	たださー	なんか	ー	例えば	この
06 Q			うんうんうん		うんうん						
07 P	モニターー	で	出てるものが録音されてる	っていうのは	分かるわけね	そのモニターで	ただ	こ			
08 Q						うん	うん				
09 P	の前	なんか	そのモニターが	映んなかったのね	で	大慌てでー	キャー	どうしよう	どうし		
10 Q					うん						
11 P	よう	どうしよう	インフォーマントがもうすぐで来るー	と	かって	わ	わめいててー	先生の			
12 Q						うんうんうん		うん			
13 P	ところに	電話して	どうします	どうします	と	かって	で	先生がー			
14 Q						(笑う)		そういう時に	先生	手伝	
15 P			先生	こなっ	だか	ちょっと	今	先生も手が離せない	と	かって	言っ
16 Q			ってくれるのー↑					(笑う)			
17 P	で	そんな	そんな	って	感じでー	まあ	すぐ行きますから	ちょっと	待っててください	と	か
18 Q					(笑う)			(笑う)			

5-3. 状況3: 発話順番を取ることによって、物語を開始しようとする

5-1で述べた「発話順番を受け取る」というのは、他の会話参加者から譲られた発話順番を^{動的}に取ることである。一方、会話参加者たちの沈黙が現れたところ、あるいは、今まで何か話していた会話参加者の発話が内容的にまとまっているところで、ある会話参加者が発話順番を^{自主的}に取って物語を開始しようとすることもある。

次の(例7)では、話者Pの「東急ハンズとか、あんな、はれっ、離れてるしねー」(01行目)という発話に対して、話者Qが「そうそうそうそう」(02行目)という発話によって応じているのが観察される。この「そうそうそうそう」という発話と少し重なって、話者Pが「うん」(01行目)と発話し、その後、話し続けることをやめている。その後に見られている3秒の沈黙から見れば、話者Pは「うん」という発話によって、自分の発話の終了を表しているのではないかと思われる。3秒の沈黙後、話者Qが発話順番を取って、「昨日はさー、…」(02行目)のように、本を捜すために起きた出来事について報告し始めている。

(例7) 資料7より

01 P	東急ハンズとか あんな はれっ 離れてるしねー うん うん
02 Q	そうそうそうそう ~ ~ ~ 昨日はさー その
03 P	うん
04 Q	ぶんっ あ 文献じゃなくて 今度 金曜までにー 「初めて学ぶー社会心理学」 っていう本を読
05 P	うん うん うん
06 Q	んでー 9章分あるのねー で それを1人が1章 受け持って なんか テスト問題を10題ぐら
07 P	うん うん うんうん
08 Q	いで作ってー みんなでー 交換してー やらなきゃいけないのねー だから 自分もー わた
09 P	うん うん
10 Q	しは 4章 担当なんだけどー 他の部分を勉強しつつー 自分は4章の問題を作らなきゃいけな
11 P	うん うんうん うん
12 Q	いの それを金曜までに やらなきゃいけなくてー その本はさー その本 捜すのも 土曜日
13 P	うん うん
14 Q	あってー 来たんだけどー 生協で そうですね これからー ご注文いただくとー 1週間後です
15 P	(笑う) うん うんう
16 Q	のでー 今度の土曜日 とかって 言われてー (笑う) それじゃ 遅いんです と思ってー

上に挙げた(例7)では、会話参加者たちの沈黙が現れたところで、一方の会話参加者(話者Q)が発話順番を自主的に取って物語を開始している。これは、沈黙を破って、雑談という活動を続けていくためだと考えられる。一方、今まで何か話していた会話参加者の発話が内容的にまとまったところで、その会話参加者の沈黙が現れるのを待たずに、すぐ、発話順番を自主的に取って、物語を開始しようとすることもある。次の(例8)の前半では、話者Qがドイツに留学する計画について述べている。「…、どうやって、暮らすかは、結構、重要問題だから、お金が」(08行目)というところで、話者Qの発話は内容的に終結している。その直後、話者Pは、すぐ、発話順番を取って、「やっぱ、でもさー、なんか、あたしが、ミュンヘン、行った時にー、…」(07,09行目)のように、ドイツに短期留学していた時に起こった出来事について報告し始めている。ここでは、話者Pが話者Qの沈黙が現れるのを待たずに、すぐ、発話順番を取って、物語を開始しているのは、話者Qの発話が内容的にまとまったため、話者Qの発話順番が終わりそ

うだと判断したからではないかと思われる。

(例8) 資料8より

01 P		うーん	(笑う)	うーん	そう
02 Q	だからー	すごい長い目で見てるしー	20年	30年のレベルで考えてるから	
03 P	なんだ				
04 Q		うん だからー	そうするとー	そんなー	別に 1年間とかー ドイツを その 留学で
05 P		うーん			うん
06 Q	安く いっ	行かしてもらって	すごい	ラッキーなことじゃない	だからー それもいいかなー
07 P					やっば
08 Q	とか思っ	てー	うん	向こうで どうやって	暮らすかは 結構 重要問題だから お金が
09 P	でもさー	なんか	あたしが	ミュンヘン	行った時にー
10 Q					なんか
11 P	見に行	った時にねー	なんか	あそこ	のー
12 Q		うん			うん
13 P	ー	[グルスゴ]	とかって	言ったらー	なんか
14 Q				おっ	お前は えー
15 P	とか言	うから	いや	ちょっと	[アンリセ]
16 Q		うん			話せるよ
17 P	とか言	うから	いや	ちょっと	[アンリセ]
18 Q		うん			話せるよ
17 P	なんか	もう	ほら	あたしが	見る
18 Q					こういう部屋を見るとしたら
					やっば
					グルーッと
					見たの↑
					え どういうこと

上の(例8)に見られるように、今まで何か話していた会話参加者の発話が内容的にまとまったため、その発話順番が終わりそうだと思うと、その会話参加者の沈黙が現れるのを待たずに、すぐ、発話順番を取って、物語を自主的に開始することがある。しかし、この場合、今まで何か話していた会話参加者が発話順番を続ける可能性もあるため、ここでは、発話順番の競合という現象が起こりやすくなる。次の(例9)では、話者Qの「…、あの一、ゾーンの入り方とか、一緒だもん」(06, 08行目)という発話の直後に話者Pは「でー、なんか、〇〇にー、Qー」(07行目)のように、〇〇さんとの話に関する物語を開始しようとしている。ここでは、話者Pが話者Qの沈黙が現れるのを待たずに、すぐ、発話順番を取って、物語を開始しようとしているのは、話者Qの発話が内容的にまとまったため、話者Qの発話順番が終わりそうだと判断しているからではないかと思われる。しかし、「んっ、パス、パス・アンド・パスとかー」(08行目)のように、話者Qが自分の今までの発話を続けているため、ここでは、発話順番の競合という現象が起こっている。そこで、話者Pは「でー、なんか、〇〇にー、Qー」と発話した後、物語を続けるのを一時的にやめている。「んっ、パス、パス・アンド・パスとかー」という発話の後、話者Qが話し続けるのをやめたため、話者Pは、発話順番をもう一度取って、「Qー、サッカー、取ってんだって、とか言ったら、へー、とか言って、…」(09行目)のように、物語を続けている。

(例9) 資料8より

01 P		また	取ったの↑	へー
02 Q	今日 サッカー	取っちゃった	また	サッカー 超面白いよねー うまかったでしょ わ
03 P	なんかねー			
04 Q	たし	で	バスケ	できるんだったら いいって 絶対 なんていうか こう フェイント
05 P			うーん	なんて なんか (笑
06 Q	のかけ方とかー	こう	ボール	読んだりとかー ディフェンスの仕方とかー こう あのー
07 P	う)	でー	なんか	○○にー Qー
08 Q	ゾーンの入り方とか	一緒だもん	んっ	パス パス・アンド・パスとかー
09 P	Qー	サッカー	取ってんだって	とか言ったら へー とか言って あー そう言えば いたな
10 Q				
11 P	ー	(笑う)	なんかー	(笑う) 隅で教わってたよー とか言ってさー 結構 バスケ 取る
12 Q		(笑う)	[そーう]	パス・アンド

5-4. 状況4: 発話順番を競うことによって、物語を開始しようとする

前の5-3で述べた「発話順番を取ることによって、物語を開始しようとする」というのは、今まで何か話していた会話参加者の発話が明らかに終わっているところか、終わりそうなところに観察されることである。一方、「発話順番を競うことによって、物語を開始しようとする」ということもある。「発話順番を競う」というのは、具体的には、次の3つのことを指す。

- (1) 今まで何か話していた会話参加者の発話が内容的にまとまっておらず、その発話が終わりそうでもない時に、他の会話参加者がそこで発話順番を取ろうとする。
- (2) 今まで何か話していた会話参加者の発話が内容的にまとまっているため、その発話が終わりそうだと思うと、そこで他の会話参加者が発話順番を取ろうとするが、今まで何か話していた会話参加者が発話順番を続けようとする。
- (3) 今まで何か話していた会話参加者の発話が明らかに終わっているところで、複数の会話参加者がほぼ同時に発話順番を取ろうとする。

本研究で用いたデータの中では、「発話順番を競うことによって、物語を開始しようとする」というのは4例観察された。次の(例10)~(例13)がそれである。(例10)(例11)は上の(1)、(例12)は上の(2)、(例13)は上の(3)というタイプのものである。

(例10)では、「あの人、なんか、自信ありげじゃん、いつも」(05行目)という話者Pの発話がまだ終わっていないところで、話者Qが「話したっけ、話したっけ、話したっけー」(06行目)と発話し、自分が何かの話をしようとすることを表してから、「あのー、もう、原稿とかねー、準備はすっかり整ってるんですか↑、って聞いたのねー、…」(06, 08行目)のように、□□さんに関する物語を開始している。今まで何か話していた会話参加者である話者Pの発話が内容的

にまとまっていないところで、つまり、話者 P の発話が明らかにまだ終わっていない時に、話者 Q が「話したっけ、話したっけ、話したっけー」のように、同じ言葉を3回も使っているのは、話者 P の話す意欲を押えるため、発話順番をすぐ手に入れたいため、自分のこれからの発話(物語)を話者 P に注目してもらうためだと考えられる。ここでは、すぐ物語を開始したいという話者 Q の積極的な意欲を察知することができる。その際に、話者 P が、「なに↑」(05 行目)と発話し、発話順番を話者 Q に譲り、話者 Q のこれからの発話(物語)に注目を示したため、話者 Q は、スムーズに物語を開始することができる。

(例 10) 資料 2 より

01 P		その学会↑	いっ	これから行くやつ↑	~~~~
02 Q	今度ね	学会に	〇〇先生が発表するの		うんうんうん
03 P	ふーん		□□	あー	本当
04 Q		後	んー	□□さんも	うーん
05 P		あの人	なんか	自信ありげじゃん	いつも
06 Q	ー	(笑う)		話したっけ	話したっけ
07 P				話したっけー	あの一
08 Q	かねー	準備は	すっかり	整ってるんですか↑	って
09 P				聞いたのねー	□□さんに
10 Q	う	大体	す	うん	ととのっ
11 P				もう	準備は
12 Q	て	んで	あたしがー	あの一	20分
13 P				発表で	その後の
14 Q	うーん	でー	専門家が	たくさん	来て
15 P				そこで	なんかー
16 Q	れー	ー	るの	って	すごい

次の(例 11)では、「…、「星の王子様」とか、そうでもないでしょう」(03, 05 行目)という話者 P の発話がまだ終わっていないところで、話者 Q は「いや、でもねー、でもねー」(04, 06 行目)という発話に続き、「あの一、こう、小さい本でー、すごい、わりと、安く、手に入るのがあったんだけど、…」(06, 08 行目)のように、本を高く買ってしまったという物語を開始している。前に挙げた(例 10)と同じように、今まで何か話していた会話参加者である話者 P の発話が内容的にまとまっていないところで、つまり、話者 P の発話が明らかにまだ終わっていない時に、話者 Q が「でもねー、でもねー」のように、同じ言葉を2回も使っているのは、話者 P の話す意欲を押えるため、発話順番をすぐ手に入れたいため、自分のこれからの発話(物語)を話者 P に注目してもらうためだと考えられる。ここでは、すぐ物語を開始したいという話者 Q の積極的な意欲を察知することができる。この発話意欲に対し、話者 P が、発話順番を終え、話者 Q のこれからの発話(物語)に注目を示しているため、話者 Q は、はじめて、物語を開始すること

ができていると思われる。

(例 11) 資料 2 より

01 P	これ 全部 揃えた↑ もう この7冊って 全集
02 Q	んー↑ うんうんうん 高ーい 涙が出るほど高か
03 P	マイナーなものって 高いんだよね きっと 「星の王子様」とか
04 Q	った っていうか うん だけど うーん いや で
05 P	そうでもないでしょう
06 Q	もねー でもねー あのー こう 小さい本でー すごい わりと 安く 手に入るのがあった
07 P	
08 Q	んだけど わたしは 全然 それがあること なんか 知らなくて 春休みにー 父親がー こう
09 P	うん
10 Q	いう本があるけど あのー もしねー それを研究テーマにするんだったら 揃えといた方がいいか
11 P	うん うんうん (咳) うん
12 Q	ら あのー 注文しよう してみたなら↑ っていうのね んで 注文をーしたの フ
13 P	
14 Q	ランスの 図書 あのー 本屋さん 大きな本屋さんに いつも なんか そこに 送る なんか

次の(例 12)の前半に見られる会話は、友人の結婚式に出席した時に撮った写真を見ながら行われたものである。話者 Q が髪の毛について、「…、中、こう、おでこ、出して、こう、下ろしてー」(06 行目)と話したところで、話は内容上まとまっている。そこで、話者 P が「◇◇さんねー、◇◇さん、この前、これ、行く前のー、…」(05, 07 行目)と、結婚式の前に旅行した物語を開始している。話者 P が物語を開始しようとする際に、話者 Q が「ゴムでー」(06 行目)と、自分の発話を続けているため、ここでは、少しであるが、発話順番の競合が現れている。話者 P が物語を開始するにあたって、「◇◇さんねー、◇◇さん」と、同じ言葉を繰り返しているのは、発話順番の競合に影響を受けていることの現れである。この繰り返しは、話者 Q の話す意欲を押えるため、また、自分のこれからの発話(物語)に話者 Q の注目を引くためだと言えよう。「…、ゴムでー」の後、話者 Q が発話を終えているため、はじめて、話者 P は自分の物語を開始している。

(例 12) 資料 4 より

01 P	やっぱ ウェディングドレス 着てる時って 靴が高いからさー 同じぐらいになっちゃうみたい
02 Q	うーん う
03 P	うん
04 Q	ーん へーーーー ー なんか みんな 同じような髪型やな □□ちゃんも◇◇さんも☆☆
05 P	(笑う) そうでしょう うーん ◇◇さんねー
06 Q	ちゃんも (笑う) 中 こう おでこ 出して こう 下ろしてー ゴムでー
07 P	◇◇さん この前 これ 行く前のー 旅行の時ねー 髪の毛がボサボサだったんだ (笑う)
08 Q	うーん うーん (笑う)

09 P | で みんなからさー 西城秀樹って 言われててねー 秀樹 秀樹 とか言われて
10 Q | うーん (笑う) 西城秀樹 うちも西城秀

次の(例13)では、4秒の沈黙後、話者Pが「んー」(05行目)と発話し、何かを話し出そうとしている。しかし、それと同時に、もう1人の会話参加者である話者Qは「ちょっ、ちょっと、ごめんね」(06行目)と発話し、自分が何かを話すことを話者Pにアピールしてから、「あの一、何だっけ、今さー、相模大野の△△で一、その、だから、月曜日にー、買い物に行ったじゃん、で、…」(06,08行目)のように、△△で抽選した物語を開始している。話者Pは、この時、「ちょっ、ちょっと、ごめんね」という話者Qの発話の直後に、「うん」(05行目)と発話している。この「うん」は、「んー」の次に来る自分の発話を中止することを表すと同時に、話者Qに「ちょっ、ちょっと、ごめんね」の次に来る発話を促しているとも思われる。つまり、話者Qは、発話順番の競合という問題に直面し、それを解決してから、はじめて、物語を開始することができていると言えよう。

(例13) 資料7より

01 P | うーん ねー うーん ▽▽スキー↑
02 Q | そうだよー スキーだねー 今年とかさー 行く↑ スキー あん
03 P | でも あれじゃない 家庭教のさー 子がさ もしかしたら 受験 の真最中かもしれないし
04 Q | あー そうか そうか そうだよー うん
05 P | んー うん うん うん
06 Q | ちょっ ちょっと ごめんね あの一 何だっけ 今さー 相模大野の△△で一 そ
07 P | うん うん
08 Q | の だから 月曜日にー 買い物に行ったじゃん で 本当は 町田だけ見るはずだったんだけど
09 P | うん うんうん うん
10 Q | ど 相模大野も 先に見たから なんかー 町田は行かないで 相模大野で済ませよう みた
11 P | うんうん うん うん う
12 Q | なったのねー で 伊勢丹 見た後にー △△に行ったんだけどー △△で買い物をしたら

5節の冒頭で言及したが、物語を開始しようとする4つの状況の中で、「発話順番を競うこと」によって、物語を開始しようとする」という「状況4」は、その他の3つの状況と比べて、その実行がより難しいと思われる。これは、他の会話参加者の話す意欲を押えなければならないからである。そして、他の会話参加者を押え、自分の話す(物語をする)意欲を示すために、他の会話参加者の注目を引きつける必要がある。(例10)における「話したっけ、話したっけ、話したっけー」、(例11)における「でもねー、でもねー」、(例12)における「◇◇さんねー、◇◇さん」のような同じ言葉の反復、また、(例13)に見られる「ちょっ、ちょっと、ごめんね」という発話は、物語を開始するにあたって、他の会話参加者の話す意欲を押えるため、また、他の会話参

加者から注目を引きつけるために語り手が行う言語行動の現れだと考えられる。

以上、5-1~4 では、会話参加者が物語を開始しようとする4つの状況について詳述した。次の6節では、物語の開始がどの状況でどの程度行われているかについて考察する。

6. 物語の開始はどの状況でどの程度行われているか

本研究で使ったデータである15本の雑談資料の中では、166の物語がなされている。そのうち、雑談の録音を開始する前に、物語がすでに始まっていて、物語の開始状況が分からないものが3つある。また、会話参加者2人が共に語り手であり、共同で物語を作り出しているものが3つある。この合計6つの物語を除いて、残りの160の物語は、すべて、開始状況が分かるものであり、1人の会話参加者が物語を展開しているものである。この160の物語を対象として、その開始がどの状況で行われているかについて考察した。その結果は次の表に示す通りである。この表における数字は物語の個数を表す。

表 1

状況 1: 発話順番を受け取る ことによって、 物語を開始しようとする	状況 2: 発話順番を持っている 途中で、 物語を開始しようとする	状況 3: 発話順番を取る ことによって、 物語を開始しようとする	状況 4: 発話順番を競う ことによって、 物語を開始しようとする
13 (8.1%)	76 (47.5%)	67 (41.9%)	4 (2.5%)
143 (89.4%)			
156 (97.5%)			
160 (100.0%)			

上の表からは、次の2つのことが言えるだろう。

- (1) 「発話順番を競うことによって、物語を開始しようとする」という「状況4」が、わずか2.5%しか占めていないことから見れば、会話参加者は発話順番を競うことによって、物語を開始するのを避けていることが分かる。これは、「殆どの場合、一時に話すのは1人の話者である」という Sacks et al. (1974: 700) の主張を反映している。
- (2) 「発話順番を持っている途中で、物語を開始しようとする」という「状況2」は47.5%、「発話順番を取ることによって、物語を開始しようとする」という「状況3」は41.9%である。この2つの状況が合計89.4%も占めていることから見れば、会話

参加者は、殆どの場合、発話順番を持っている途中で、あるいは、発話順番を取ることによって、物語を開始しようとするということが分かる。

7. ま と め

本稿では、雑談の中に現れる「過去に発生した出来事の報告」を「物語」と呼び、日本語母語話者の雑談における「物語の開始」に焦点を当て、それと「発話順番のやり取り」との関係について実証的に考察した。

まず、「発話順番」を「一人の会話参加者が話し始めてから話し続けることをやめるまでを指すもの」と定義し、会話参加者が物語を開始しようとする状況を次の4つに分けて詳述した。

- 1) 発話順番を受け取ることによって、物語を開始しようとする
- 2) 発話順番を持っている途中で、物語を開始しようとする
- 3) 発話順番を取ることによって、物語を開始しようとする
- 4) 発話順番を競うことによって、物語を開始しようとする

次いで、物語の開始はどの状況でどの程度行われているかについて考察した結果、(1) 会話参加者は発話順番を競うことによって、物語を開始するのを避けていること、(2) 会話参加者は発話順番を持っている途中で、あるいは、発話順番を取ることによって、物語を開始しようとする場合が殆どであることが分かった。

付 記

本稿は未公開博士学位論文の一部を修正したものです。論文執筆時にお世話になった名古屋大学の尾崎明人教授、大曾美恵子教授に、この場を借りてお礼を申し上げます。また、雑談資料の収集では、慶応義塾大学の平高史也助教授、調布学園女子短期大学の谷口すみ子助教授をはじめ、日本人の方々から多くのご協力をいただきました。記して感謝申し上げます。

参 考 文 献

- 小室郁子(1995) 「“Discussion”における turn-taking——実態の把握と指導の重要性——」『日本語教育』85号, pp. 53-65, 日本語教育学会.
- 中田智子(1990) 「発話の特徴記述について——単位としての move と分析の観点——」『日本語学』第9巻第11号, pp. 112-118, 明治書院.
- 西原鈴子(1991) 「会話の turn-taking における日常的推論」『日本語学』第10巻第10号, pp. 10-18, 明治書院.
- メイナード, 泉子. K. (1993) 『会話分析』, くろしお出版.
- 山崎敬一・好井裕明(1984) 「会話の順番取りシステム——エスノメソドロジーへの招待」『月刊言語』第13

- 卷第7号, pp. 86-94, 大修館書店.
- 李麗燕 (1995) 「日本語母語話者の会話管理に関する一考察——日本語教育の観点から——」『日本語教育』87号, pp. 12-24, 日本語教育学会.
- (1997a) 「日本語母語話者の雑談における「情報伝達行動の再開」」『日本語教育』92号, pp. 48-59, 日本語教育学会.
- (1997b) 「日本語母語話者の会話における「情報伝達行動の持続」」『世界の日本語教育』第7号, pp. 61-75, 国際交流基金日本語国際センター.
- (1997c) 「日本語母語話者の日常会話における「物語の自主的な開始」」『平成9年度日本語教育学会春季大会予稿集』, pp. 21-26, 日本語教育学会.
- (1998a) 「日本語母語話者の雑談における「物語の終了」——物語を終了するために語り手が行う言語行動を中心に——」『日本語教育』96号, pp. 85-96, 日本語教育学会.
- (1998b) 『日本語母語話者の雑談における「物語」——会話管理の観点から——』(未公刊博士学位論文), 名古屋大学大学院文学研究科日本言語文化専攻.

- Bygate, M. 1987. *Speaking*. Oxford: Oxford University Press.
- Coulthard, M., and D. Brazil. 1992. Exchange structure. In *Advances in Spoken Discourse Analysis*, ed. Malcolm Coulthard, 50-78. London: Routledge.
- Duncan, S. J. 1972. Some signals and rules for taking speaking turns in conversations. *Journal of Personality and Social Psychology* 23, no. 2: 283-92.
- Duncan, S. J., and G. Niederehe. 1974. On signalling that it's your turn to speak. *Journal of Experimental Social Psychology* 10: 234-47.
- Edelsky, C. 1981. Who's got the floor? *Language in Society* 10: 383-421.
- Jefferson, G. 1978. Sequential aspects of storytelling in conversation. In *Studies in the organization of conversational interaction*, ed. Jim Schenkein, 219-48. New York: Academic Press.
- Labov, W. 1972. *Language in the inner city*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Levinson, S. C. 1983. *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press. (安井稔・奥田夏子訳 1990 『英語語用論』, 研究社).
- Maynard, S. K. 1989. *Japanese conversation: Self-contextualization through structure and interactional management*. Norwood: Ablex Publishing Corporation.
- Polanyi, L. 1985. Conversational storytelling. In *Handbook of Discourse Analysis*, ed. Teun A. van Dijk, 183-201. vol. 3 Discourse and Dialogue. London: Academic Press.
- Ryave, A. L. 1978. On the achievement of a series of stories. In *Studies in the organization of conversational interaction*, ed. Jim Schenkein, 113-32. New York: Academic Press.
- Sacks, H. 1972. On the analyzability of stories by children. In *Directions in Sociolinguistics*, ed. John J. Gumperz and Dell Hymes, 325-45. New York: Holt, Rinehart and Winston, Inc.
- Sacks, H., E. A. Schegloff, and G. Jefferson. 1974. A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language* 50, no. 4: 696-735.
- Shultz, J. J., S. Florio, and F. Erickson. 1982. Where's the floor? In *Children in and out of School*, ed. Perry Gilmore and Allan A. Glatthorn, 88-123. Washington: Center for Applied Linguistics.
- Tannen, D. 1984. *Conversational style: Analyzing talk among friends*. Norwood: Ablex Publishing Corporation.
- Yngve, V. H. 1970. On getting a word in edgewise. In *Papers from the Sixth Regional Meeting*, 567-78. Chicago: Chicago Linguistic Society.